

## 第47回ベケット研究会 発表要旨

岩永大気 「最悪の方」への弁証法 ——『いざ最悪の方へ』における措定と否定

フィクションが空虚に穿たれた裂開のようなものであるとすれば、1940年代半ば以降のベケットの作品は、一面において、裂け目を広げる肯定の力と、空虚と裂開を一致させる方向に働く否定の力が拮抗する力学の場であると捉えられよう。この弁証法が他に類を見ない密度で展開されるのが1983年の『いざ最悪の方へ』であり、本発表ではこの作品を題材に、何がどのように措定され、否定されるかを見、二つの力のあり方の範例を取り出すことを目指す。

Michiko TSUSHIMA, “The Skin of Words”: Trauma and Skin in *Watt*

(対馬美千子 「言葉の皮膚」 ——『ワット』におけるトラウマと皮膚——)

本発表ではベケットの小説、『ワット』が表すトラウマと皮膚の関係について考察する。まず、アンジェーの「皮膚—自我」に関する精神分析理論を参照しながら、『ワット』をベケットがつむぎだした「言葉の皮膚」、すなわち彼が自らのトラウマ的危機に直面し、回復しようとした心的皮膚としてとらえ、考察を進める。そしてこの「言葉の皮膚」としての『ワット』という作品が、同一化することのできないトラウマの「力と真実」(カルース)を、表象装置自体を混乱させる力として表現していることについて、コナーの皮膚論との関わりにおいて検討する。

Mark BYRON, *Wordly Corrasion: Philology and Narrative in Worstward Ho*

TBA